

岡山ＳＲＨ研究会

会報誌～第2号～

平成18年3月22日(水)
岡山ＳＲＨ研究会運営委員会

まぶしい日ざし、温かい空気に包まれ、日ごとに春めいてきたことが感じられる穏やかな季節となりました。

春は、出会いや別れ、門出の季節。心を入れ替え新たな気持ちでスタートするには、絶好の機会です。

不安や戸惑いも避けられない時期ではありますが、皆さんのもとに、心温まる素敵なお会いや出来事が

たくさんたくさん訪れますことを、心から願っております。

第9回研修会報告

平成18年2月19日(日) 岡山県ボランティア・NPO活動支援センター(ゆうあいセンター)にて、「岡山ＳＲＨ研究会 第9回研修会」が開かれました。

今回は富岡美佳先生を講師としてお招きし、「思春期の性成熟と自己意識」という演題で素晴らしいご講演を頂きました。その後は情報交換会ということで、アドバイザーの山本勉先生、上村茂仁先生と共に、性教育に関する実態や課題、またＳＲＨの活動等について意見交換の場も設けられ、大変充実した研修会となりました。

今回のご講演の内容について、富岡先生がまとめてくださいました。研修会に出席できなかった方々にも、是非読んで頂きたいと思います。

「思春期の性成熟と自己意識」

中学生とその養育者へのインタビューから見えてきた思春期心性を基軸とした性教育とは
岡山県立大学大学院

保健福祉学研究科 博士後期課程 富岡 美佳

昭和30年代の子どもたちは、路上にあるものや自然の中からさまざまな遊びを想像していました。しかしながら、防犯ベルや携帯電話を持ち、子どもだけで外で遊ぶことすら困難な時代が今日到来しています。その子どもの歴史をふり返ってみたとき、決して昭和の初期の頃の子どもが恵まれていたわけではなく、貧困や労働といった苦痛を時代のなかで経験していたと思います。豊かさがもたらす今の子どもの社会を十分理解した関わりが性教育でも必要となっています。性をとりまく環境世界の変化における教育において、行き過ぎた性教育と批判されたり、なにが真に必要とされる教育なのか問われ続けています。このようなことから、教育を受ける主体の側から考えて行きたい思いで、中学生とその養育者のインタビューを2年間おこないました。そこでは性成熟というエネルギーを自分の体で感じながらさまざまな人間的成长をしていることを知りました。自分の身体にリアリティを感じ、性的自己概念を形成し、他者との関わりを通して自己意識を高めていく姿がありました。私たちは、性教育に行くときに「あのことも教えてあげたい・・・このことも・・・」と思うことがあります。しかし、この時期の彼らは自分を大事に思う意識(自尊感情)や自己愛、価値観、などの自己への意識を自然に高めておりその成長の力を信じ、見守ることが大切だと感じました。そこで、グループ討議や、アサーショントレーニングや科学的な方法での知識の導入などを実践に取り入れています。その結果、自らが自分の力を発掘し、考える力や問題解決能力、コミュニケーション能力などを高めていくことが感想に表れてきました。その実践においては、当然のことながら発達段階に応じた関わりが必要です。そのことから文科省の提案を参考に中学校において必要な性の教育のプログラムを考案しました。少しずつではありますが中学校との協働により3年間を通した性教育が実現してきています。そんなことを日々行う中で、時折、性の教育の指針を自分の中で求めることがあります。いったいなにを目指すのだろうかと。そんな折、我が岡山にはたくさんの先生方がおられ、自分を支えてくださっていることに気がつきました。なにより先生方が築いてこられた性教育の歴史を大切にしたいという思いと、エキスパートとして実践で感じてこられた理念をお聞きすることで学びを得たいとインタビューをさせていただきました。先生方から自分で課題をみつけ問題を解決していく資質や能力を育成することや相互作用を大切にすること、そしてどういうふうに満足に生きるかということをみつけていける力を育成することであるということを教えてくださいました。性の教育は大きく人の心の教育にかかわることを常に頭におきながら、エキスパートの先生方のお言葉で印象的だった「ここを動かす性教育」を実現していきたいと思っています。

交流＆癒しの広場

上村茂仁先生のコラム 【2】

この1ヶ月ほど、毎日リストカットをしてくる女の子がいます。毎日縫わなければいけないほどの大きな切り傷をつけて。私やスタッフが時間をかけて話を聞いてみた所、「若いときの中絶」が原因でした。「赤ちゃんを殺してしまった、なのに自分はのほほんと生きている、それが時々、許せなくなる」とそしてそんなことを思い出したときリストカットになるということでした。私は、毎日クリニックにやって来る彼女に対して、「自分が生きるためにリストカットをしているのだったら、それは仕方ないことだ、もしそれをしなかったら、貴方が死んでいるのかもしれないから」と彼女に話しました。それから、毎日、彼女が切ってきたら、何もとがめないで縫合消毒を、毎日もくもくと繰返す事にしました。そんな日々が4週間ほど続いたとき、彼女がふと独り言のようにつぶやきました「先生には負けた、自分もこれから目標を決めたし、もう切らん！」。その日から彼女は本当にリストカットをしなくなりました。

私や私のスタッフがいつも思うことがあります。中絶は、望まない妊娠をしてしまった女の子のたった一つの救済方法なのだから、仕方が無いのだと。男女の付き合いや妊娠、性感染症についてきちんと子供に教えてあげられなかつた、大人の責任なのだと。

皆さんも、もし性教育で中絶のことを話すときは、決して、中絶は人殺しだとか言わないで下さい。そういうわれた中絶経験のある女の子は、立ち直ることすら出来なくなってしまいます。そして中絶する女の子に関わる、医療関係の方、後の心のケアをしっかりお願いします。あっけらかんとしているように見える女の子ほど、心に辛い傷を残していますから。

子供たちから、相談を受けて、今、何もアドバイスすることが出来なくても、関わりだけは保ってください。いざとなったとき、困ったときあの人相談できる、そんな関係を作ることが、子供たちに対する私たちのかかわり方だと思っています。



コラムバトンリレー

第2走者>> 三菱水島病院 助産師 玉井 道子

『始めの一歩』

平成9年のある日、進学校の女子高校生数人が「助産師の仕事」を知りたいと、我が職場に訪れました。説明を終えて玄関まで送る途中、何か物を言いたげな視線を感じました。尋ねると「月経が遅れている。一回だけ性交渉があった」との事。誰にも言えない不安の日々を過ごしていたようでした。話の中で、彼女にとって妊娠は別世界のことであり、全てそれは他人の話と捉えており、あまりの知識の無さに愕然としました。それまで助産師として妊娠後からの関わりが主であり、それ以前の関わりは皆無でした。彼女との出会いがきっかけとなり、思春期に関わる「始めの一歩」を踏み出しました。思春期相談士の資格を取得し、思春期の子どもたちの実態や思いを知れば知るほど、自分がいかに「井の中の蛙」だったのかと思い知りました。

SRH研究会で多くの方に出会い、学び、「井」から泳ぎ出して、少しでも海に漕ぎ出せばと参加させて頂いています。助産師として微力ではありますが「出産時の両親の想い・胎児の話・性や命の尊さ」を子どもたちと一緒に考え、伝える事が出来ればと思っています。SRH研究会の有り難さを感じている今日この頃です。

今後の予定・お知らせ

平成18年5月14日(日)「岡山SRH研究会 第10回研修会」の案内を同封しておりますので、ご確認の上、出欠の連絡をお願いします。

第25回日本思春期学会は、大阪市の中ノ島公会堂で、8/25(金)～8/27(日)に開催されます。ふるって参加しましょう。

岡山SRH研究会のロゴマークを検討中です。心がホッと温まるような、SRHらしい素敵なマークと一緒に考えましょう
皆様からのご提案、ご意見をお待ちしております。



【編集後記】

このたびも、原稿を提供してくださった皆様に、心より御礼申し上げます。会報誌に関するご意見・ご感想等も、お待ちしております。

ご意見・お問い合わせはこちらまで

連絡先：岡山SRH研究会事務局(ウイメンズクリニック・かみむら) 岡山市本町4-18 FAX(086)803-5339